本山：本山でございます。何とか45分までに終わりたいと思っております。

八木：5時15分ぐらいまで延長するつもりです。

本山：最初に、少なくとも司会をなさっている八木先生は現在の日本の学問全体を背負う重要人物であります。その重要人物に私を紹介してもらう時に、わが学部の国際経済学の担当と言われるとガクッときます。ちょうどバスク人のフランシスコ・ザビエルが人に紹介される時に、スペイン人ですと紹介される時の屈辱を思い出します。実は私はインターナショナル・エコノミーと闘ってきまして、ワールド・エコノミーを定着させようと一生懸命になってきたものでありまして、わが学部のカリキュラムでは世界経済論でありますので、お間違えのないように。つまらんことにこだわりますけども、国際経済学と世界経済論とは随分違うんでございます。

それはともかく何を言いたいかと申しますと、三田先生が最後にメッセージをお出しになりました、河上肇ですらある限界があるということ、つまり目覚めた前衛が無知蒙昧な、そんな露骨な言い方はされませんでしたけども、大衆を領導していくところに限界があったという、まさにそうなんでありまして、少なくともマルクス主義の失敗というのは、革命は成就した。でも革命以後のことについては失敗したと認めざるを得ないんじゃないかと思います。多かれ少なかれそこでは正義の名のもとにおいて、科学の名のもとにおいて、権力の名のもとにおいて、無知蒙昧な大衆たちが結局抑圧され、抹殺されていったというそういう歴史、その歴史を現代の自分のものとして受け止めなければマルクス主義の再生はないだろうというのを私は心の底から思っております。

その場合に、果たして再生の糸口はあるんだろうかということであります。実は、スターリン主義的な行き詰まりと同じく、現在のアメリカの行き詰まりもあるわけでありまして、アメリカも正義を振り回してきてよその国に勝手に軍隊を押し入れていって、そして民主主義を敷衍するんだ、お前たちはありがたく思えという、問題はここなんでありまして、マルクス主義の過去の罪悪を今のアメリカもやっていると私は思っております。それに対する抵抗は何なんだろうかという時に、少なくともヨーロッパ段階ではスピノザがかつて考えたこと、つまりカルヴァン的な正義に対して、正義のもつ暴虐に対して、それこそスピノザは命を張って闘ったわけであります。その思い出が人々の心の中にありまして、今ではスピノザがやろうとしている人々の多様性というか、唯一の中心ではなくて中心がいくつも分かれている、茎と茎とが連動して互いに連鎖反応し合うという、そういったものをマルチチュードという言葉に置き換えまして、現在そういった権力の暴虐に対する抵抗の砦というものは何なんだろうかということがヨーロッパ段階ではやられているわけであります。

ところが我々の悪い癖でありまして、ヨーロッパでそれが行われてきたらすぐもうヨー

ロッパの哲学というかたちで、そのまま日本語に直さずにもってくるというのが悪いところでありまして、私は何であれ日本語に直せという昔からの主義でありますから、我が日本においてどうなんだろうかということであります。つまり、多様な人間の多様な存在、多様な価値を認めていくんだという思想というのは、何もスピノザだけにあるんではなくて、あるいはネグリ・ハートだけにあるんではなくて、少なくとも日本にもあったし中国にもあった。それをもう一度紡いでいくということが、我々がやるべき作業なんだと私は思っているわけであります。

河上肇が見いだしたというよりも日本のインテリゲンチャーのかなり多くの方、湯川秀樹もそうだったんですけど、三浦梅園、大分の片田舎の哲学者が見いだしているわけであります。ここに「玄語」という、つまり語ることのできないモノというものでありまして、言葉で表せないけれどもその存在があるんだという、そういうものが互いに連動しあって、お互いがリズムを打っていくんだという、こういう思想なんですね。梅園のおもしろいところは、ご存じのように陰陽（おんみょう）思想ってありますよね。陰と陽…そこにはもうすでに陰はカゲで陽は日という区別がありますよね。梅園はコザトヘンを取ってしまうんです。それで右側の旁だけのインとヨウを持ってくるわけなんですよね。つまり、彼は上下の区別も否定します。上があるから下がある、下があるから上がある。しかし、だからといって上が上位の概念で下が下位の概念じゃないんだという、これはすごい思想なんであります。単なる弁証法の元祖というよりも、弁証法の中のある思い入れというのか、あるアプリオリーとういのか、そういうものを排斥して全てを相対化しながら、そこのさざ波のよって立つ所以というか、生まれてくる力というものをみようとしたもので、これはすごい人であります。

実は私の恩師、小野一一郎という先生なんですけども、その叔父さんが小野十三郎という詩人であります。その叔父さんが日本の敗戦の日に、「半島の若者たちはみな帰ってしまった」、つまり朝鮮半島の連中たちはやっと母国へ帰ることになったと。しかし…と嘆いて、こういう状態をついて「三浦梅園、しきりにあなたを想う」と。あなたが生きていたらこの状況をどう説明しただろうか？というようなことでありまして、梅園の貨幣数量説を河上肇が発見したという以上に、梅園に対する河上肇の思い入れは強かったのではなかろうかというように私は思います。

つまりマルチチュードというカタカナ語が本当に多様な人間の生き方を支持しているんだということになる時には、私たち日本人は日本語、中国人は中国語というかたちで自分たちの足元というんでしょうか、骨の髄というものを言葉で表していく作業というのが必要になってくる。残念ながら今の日本の社会科学は、我々日本の過去の偉大な財産というものをあまりにも軽視しすぎているということの抗議を込めて、今日はお話をさせていただいたわけであります。

中国にもそれを探すといくらでもあるわけでありまして、毛沢東の先生である楊昌済、長沙の湖南第一師範の「修身」の先生です。ご存じのように毛沢東の最初の奥様といわれ

ている人がこの恩師の娘さんだそうでありまして、その点についてはいろんなエピソードとか裏話があるそうでありますが、私はそこには入りませんので、少なくとも毛沢東は楊昌済の影響を受けているんだということは十分言えるわけであります。もちろん楊昌済はご存じのように古今東西から常に中国と西側とは融合していかなければならないんだとか、思想というのは母であると。自分の心の中に思想が発して、これを行動において実現していくんだという、後のグラムシ的な道徳的ヘゲモニー論というのか、そういうのがあるわけです。

私は楊先生自身を十分研究しておりませんけれども、無二の親友が入水自殺をしたとか、非常に激しい友だちたちをもっているわけでありますし、日本に対しては非常に厳しい言い方もしてきたわけですけども、そういう流れがあり、私たちはもうひとつ中国の深さがよく分かってはいないんですけども、つたない私の言語能力で、中国にもそういったものがあったはずだということを発掘していこうという思いをもっております。

毛沢東の考え方を十把一絡げにやっちゃいけませんけれども、少なくとも現象的にはカルヴァン的なものがあったということであります。少なくとも洪秀全の考え方です。つまり、「すべての人は私することなく、すべてのものは上主に帰する」、「天下の人はみな兄弟姉妹である」、「田あればともに耕し、飯あればともに食い、衣あればともに着、金あればともに使う」という、こういう絶対的平均主義・相互互助主義というんでしょうか、論語の中に「寡きを憂えず、均しからざるを憂う」という思想、これが太平天国におけるコンミューン的な結合原理になったわけです。基本単位は25戸からなる「両」であります。それから生産・分配の平等、少なくともいろんな活動に人々が集まっていくということでありますけれども、中国の経典のことごとくを邪教として排撃していった。酒・煙草・賭博を禁止するカルヴァン的なことをやり、そして柔らかい手をした者は、これは労働者階級じゃないということで斬首されていく。反対派は容赦なく処刑されていくという、そういう忌まわしい太平天国の思想の高さにかかわらず、やっていることは人間の抹殺というか、そういったものが平等思想のもとに行われてきたというおぞましい姿…これは言ってはならないことかも分かりませんが、中国でかなり毛沢東の後半の分野で皆さん方が経験なさったことではないだろうかと思うわけであります。

だからマルクス主義というよりも革命というものを行っていく時に、現状を否定していくことには非常に大きな力がある。しかし革命をなし遂げたあとに、人間の顔をした社会をどうやって作っていくかという、そういう面をとにかく今作っておかなければ、マルクス主義は過去のものであったということに帰せられることによってどんなに大変なものが捨てられていくかという、同時にマルクス主義の過去の罪悪をどういうかたちで現在に生かして、新しい人間の顔をした社会建設をどうしたらいいのかという、その中心は少なくとも人々は多様である、特定の偉大な大思想で人々が蹂躙されてはいけないのだと、そういうことの学問的な深まりというのか、そういったものをしていかなければならないと、舌足らずな表現ですけどれもそう思っているわけです。

実は我々世界経済論をやっている連中、国際経済論ではありません、世界経済論をやっている連中たちには、ネグリ・ハートなんかの「帝国」ということが大きなテーマであります。そのネグリ・ハートが言っている「マルチチュード」というのが大きなテーマであります。それを我々が、マルクス主義をくぐり抜けた人間が、もう一度それを自分たちの日本という環境のもとで叩き直していくという作業が必要なんだ。こうすることが河上肇大先生の遺産を我々が受け継ぐことになるだろうと、ちょっとかっこいい表現をしてしまいましたけども、そういうことでございますので是非ご理解いただきたいと思います。以上でございます。

（拍手）

八木：本山先生、失礼しました。世界経済論の本山教授でした。それでは討論に入りたいと思います。非常におもしろい問題がいくつか出ていると思います。世紀の河上肇を軸とした中国と日本における政治経済学がどのような意味を持ったか、あるいはマルクス主義といってもいいですけど、その問題ということについて、大きな問題ですけれども若干の手掛かりを得たいと思います。フロアの方でもけっこうですから、挙手をして発言を求めてください。

では最初に司会のほうで問題を出させていただきます。三田先生は河上を「士」としての立場で自分を規定して、マルクス経済学・マルクス主義の中で結びついてエリート主義的なプロレタリア独裁主義を是認する結果になったのではないかというような意見を言われました。それから本山教授はカルヴァン主義でないかたちのものがもしかしたらあるかもしれないと言われました。毛沢東についてはマルクス主義というよりもむしろ東洋的な主意主義・ボランタリズムというものが大きな意味をもって、それが毛沢東思想の大きな伝統思想の中のベースにあるものだと言われています。

そこで皆さんにお尋ねしたいのは、では伝統的な中国や日本の中でにあるそのような思想、自分の行動や意思というものに強い意味を置くような思想は、独裁型の政治機構や政治システムというものを正当化することにならざるを得ないのだろうか、それともほかの可能性があるのかどうか、そういうことについてお尋ねしたいと思います。すでに出ていた問題ですので、パネリストの方、ご意見をいただければと思います。これは問題を出されなかった大西先生いかがでしょうか。

大西：ちょっとずれるかもしれませんが、実は先ほど番外で三田さんと議論をしていたことを紹介いたしますと、本山報告とも実はかなり関わっていてアッと驚いたんですが、洪秀全はキリスト教ですから西洋思想ですね。つまり、中国近現代に存在した各種の思想が西洋的なものであったか、東洋的なものであったかという点からすると、実は毛沢東も西